日本音楽教育メディア学会
(JAPANESE MEDIA SOCIETY FOR MUSICAL EDUCATION)

JMSME News Letter

2021.1vol.12

発行：令和 3 年 1 月 15 日
日本音楽教育メディア学会事務局
125-0062 葛飾区青戸５-５-16
メールアドレス info@jmsme.org
ホームページ
https://jmsme.org/

ご挨拶　　田中功一（日本音楽教育メディア学会会長）

皆様、2021 年もよろしくお願い申し上げます。

2020 年 8 月の総会にて谷中 優先生から会長を引き継ぎました。先生は本学会を設立され、学会の前身である「日本コンピュータ音楽協会」から現在まで、通算 27 年に亘り学会を支えてこられました。先生の後任として私は甚だ力不足でございますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。少し自己紹介させていただきます。私は昨年 3 月まで立教女学院短期大学幼児教育科教員として音楽関連の授業を担当し、その中で ICT の活用に取り組んでまいりました。昨年、同校を退職した後、現在、放送大学の客員研究員という立場で研究を続行しております。ICT 活用のご縁から 2016 年より本学会にお世話になっております。

会長としての抱負は、任期 2 年間で学会の機能向上を目指して努力したいと思います。本学会は音・音楽とメディアの関わりに注目する研究活動を行ってきました。そこでは、メディアを多様な媒体と位置づけ、言葉、文字、楽譜、身体表現、絵画、写真、映像、楽器、ICT 機器、その他コミュニケーションのなかだちを担うあらゆるものをメディアと捉えています。2020 年はコロナ禍により授業をオンラインで行うことが要請され、これにより多くの先生方がオンラインツールを使うことになりました。先生方はオンラインの問題点を感じつつ、一方で利点も発見されたと思います。コロナ禍後の授業の形態は、対面とオンラインにより進められる可能性があります。このような状況で、メディアを積極的に意識する本学会の役割は大きく、会員の先生方のご活躍が期待されていると思います。先生方の益々のご多幸とご活躍を祈っております。

学会トピックス

日本音楽教育メディア学会第 12 回研究会を開催いたします。

日時：2021 年 2 月 14 日（日）10：30～16：30

場所：葛飾シンフォニーヒルズ別館ビジュアルルーム

＆ オンライン開催

＊情勢によりオンラインのみの開催となる場合があります。

第１部　報告&ディスカッション

コロナ禍の教育現場より報告

～対面とオンラインによる教育の「新たな日常」を考える～

第２部　口頭発表

第３部　情報交換会

第１部　話題提供者

飯泉正人（牛久市立向台小学校）

茨城県牛久市の公立小中学校は６月８日に授業を再開した。分散登校での午前中授業から始め、２週間後通常授業に戻した。しかし、音楽科の授業は、他教科の進度の遅れを補うため、ほとんどの学年が時数を減らしての授業再開となった。文部科学省、茨城県教育委員会、市教委などから送られた目安となる「コロナマニュアル」はあったものの、教科指導の具体的な対策は学校が判断する状況であった。環境面からの対策を中心に報告する。

飯泉祐美子（帝京科学大学教育人間科学部幼児保育学科）

今年度は、前期完全非対面授業、後期一部の科目の中の数コマのみ対面授業、残りは非対面授業であった。このような状況下で、教員として、当初から「非対面授業でも学生の学びの質を落とさない。質を担保する。」その思いがあった。一年を振り返り、その思いが達成できたかを考えると共に、この状況から偶然知ることができた非対面授業の対面授業に勝る「よさ」、今後の活用の可能性等、「新たな日常の新たな授業」として考えます。

小林田鶴子（神戸女子大学文学部教育学科）

コロナ感染の広がる中、本学では前期は全てオンライン、後期は専任が対面授業となった。前期はピアノや弾き歌いレッスン、音楽科教育法、ゼミで、Zoom による双方向授業と作成映像や資料を配信するオンデマンド授業を実施。音楽科教育法の模擬授業では和楽器を使うものや合奏のみ、クラスを半分に分けてオンラインと対面を同時に行うハイブリッド授業を実施した。本報告では、後期授業も含めたこれらの授業の利点や課題を述べる。

兼古勝史（立教大学・放送大学）

緊急事態下に始まった 2020 年度の授業は、音楽教育からメディア系教育まで「音」をテーマとする教育実践にとって、試練と変革、試行錯誤のときであった。オンライン・遠隔授業と「音」は一見、相性が良いようにも思える。音はデジタル情報に置き換えやすいからだ。しかし「静けさ」を含む人間の「耳」の体験を、オンラインで共有することは簡単ではない。オンライン教育での音の共有の限界と新たな可能性について考えてみたい。

第２部　口頭発表者・タイトル

発表順は変更になる場合がありますので 10 日前にホームページでご確認下さい。

ICT を活用した音楽づくり教育の動向と展望
岡田 愛（東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科・院生）

曲想と音楽の構造との関わりに着目した言語活動とその分析　―ヴィヴァルディ《春》の鑑賞授業において―
後藤　友香理（静岡大学）

音楽理論学習における e ラーニングの活用（2）　―LMS のドリル及び解説映像作成を通して―
小林　田鶴子（神戸女子大学）

小学校音楽科の鑑賞領域における音楽的な見方・考え方
飯泉　正人（牛久市立向台小学校）

保育者養成校におけるピアノ初学者の個人練習の内容調査　―自宅練習の音データと半構造化インタビュから―
林　麻由美（東京福祉大学短期大学部）、田中功一（放送大学）、小倉隆一郎（文教大学）、辻　靖彦（放送大学）

~COLUMN~

「新しい時代の音楽」という言葉が聞かれるようになって、もうだいぶ経つように思われる。オンラインレッスンも当然のように行われ、その形態もいろいろだ。専用のチャンネルにでも登録していなければ見られないような、著名な音楽関係者の演奏や講義も、スマートフォンから気軽に視聴できるようになった。

聴衆のいないステージも、また、当然のように催されるようになった。

来月、ベートーヴェンのピアノソナタ「テンペスト」を演奏する機会を持たされた。もちろん無観客である。シェークスピアの「テンペスト」にインスピレーションを感じて作られたといわれるこの作品。冒頭のアルペジオは、嵐の過ぎ去った後の取り残された孤独を感じさせる。Largo -Allegro-Adagio と目まぐるしく変わるテンポは、現代の移り変わりの速さと葛藤を感じさせる。沈み込むようにして終わった 1 楽章の後には、変ロ長調のアルペジオが温かいぬくもりを与えてくれる。そして切れ目なく演奏される 16 分音符に埋め尽くされた 3 楽章は、行き場を探してさすらう心情を表していると言っても良いだろう。そうやって考えると、この曲は情景描写や文学作品からの影響だけでなく、その裏にあるベートーヴェンの人生観、世界観が詰まっている、まさしく今の私たちに課せられている新しい音楽観を模索しているような作品なのである。

舞台と観客席が同じ時間、同じ空気を体験しているのとは違う、音楽配信。全く別の意味での緊張感を持って臨まざるをえない今の時代。私たちの疾風怒濤の時期がきている。

森永美穂子（武蔵野音楽大学）

連載「子どものうた」

ーふたつある校歌ー

小学校の校歌というと、その多くはその土地の風景や、人々の様子、その地域の歴史がうたわれ、郷土愛が生まれるような歌詞のものが多い。今回はふたつの校歌を持つ「千代田区立番町小学校」を紹介する。この小学校は明治 3 年に東京府下仮小学校として誕生し、翌年の明治 4 年 12 には仮小学校を廃し文部省直轄の小学第二校の呼称に改められた歴史ある小学校である。この小学校はこれまでの歴史の中で皇室の台臨や海外からの要人の来校が数多くあり、明治 35 年には「われらがかざせる」という曲目ですでに校歌が存在した。このタイトルは大変有名な東京女子師範の校歌「みがかずば」と似たタイトルのように思う。現在うたわれているふたつの校歌は 100 年近い誕生の時期の差のあるものである。それぞれの 1 番を紹介する。

「われらがかざせる」

われらがかざせるこの梅の
花こそ心のしおりなれ
学びの庭の霜雪に
たえて忍びてくずおれず
静かに春を待ちてこそ
世にかぐわしき花も咲け
（明治 35 年制定）

「輝いて今日を」

朝の光に　輝いて
眉あげ　生命新しく
薫れ　この街にこの空に
梅のつぼみが微笑むように
夢をひろげあい
さあ　今日も歩もう
（平成 12 年制定）

このふたつの校歌を歌う子どもたちは何を思うのだろう？みなさんは何を感じますか？

帝京科学大学教育人間科学部教授　飯泉祐美子

会員メッセージ

大海由佳
（帝京科学大学教育人間科学部こども学科教授）

小学校の全科教員は音楽科の授業を担当するため、ピアノ演奏技術の取得は必須です。

しかし、近年の教員養成校の学生はピアノ演奏経験がない「ピアノ初心者」が多く、ピアノ演奏困難者は在校生の半数を超えていると思われます。

また、ピアノ演奏技術修得を目的とする音楽授業科目をカリキュラム上で確保している養成校は多くありません。

さらに、この１年間、コロナ禍のため大半の教員養成校がオンライン授業など非対面でのピアノレッスンを実施していました。

このような状況を踏まえ、現在、メディアを活用して「小学校歌唱共通教材」のピアノ伴奏曲自習練習が可能となるピアノ練習法の研究を進めています。

小林由香（太陽第二幼稚園）

昨年度より入会させていただきました小林由香と申します。幼稚園副園長として、幼児教育の現場に携わりながら、大学の非常勤講師として将来の保育者の育成にも取り組んでいます。

幼児期の子ども達にとって音楽とは、「自己表現」であり、「友達と繋がる手段」であり、「新しいことへの挑戦」だと思料します。正しい奏で方、美しい音を目指すことも大切ですが、まずは、表現することを楽しみ、友達の音と合わせる醍醐味を知り、音と音が織りなす世界を存分に味わえるよう、導いていくことが我々教師の役割であると認識しています。本学会での皆様との交流やご研究発表等を通し、「幼児期教育における音楽の役割・重要性」について更に知見を高め、「子ども達が音楽に向きあう際の教師としての指導力」の向上に繋げてまいりたいと考えております。

また、コロナ渦においての幼稚園での音楽活動は、従来の方法だけではなく、新たな触れ合い方法の模索も大きな課題です。我が幼稚園では、2 月に音楽発表会を開催予定ですが、子ども達一人一人が、「自分の音」を楽しめるよう、プロデュース＆サポートしていく方法も検討を深めて参りたいと考えております。皆様、今後とも多岐にわたるご指導の程、宜しくお願い申し上げます。

会費納入のお願い

今年度（2020 年 8 月 1 日～2021 年 7 月 31 日）の年会費
（正会員）7,000 円、（学生会員）4,000 円の納入を、2021 年 3 月 31 日までに
下記の振込先にお願いいたします。
≪振込先≫　ゆうちょ銀行 10510-91267401
ニホンオンガクキョウイクメディアガッカイ
※入会・退会に際しまして、又、会費についてご質問等ございましたら
事務局までご相談ください。

事務局だより

会員の皆様、明けましておめでとうございます。
長らく続く自粛と巣篭もり生活、社会的距離の制限は、これまで自明だった「常識」や「日常」を揺るがし、「教育」「芸術・表現」「コミュニケーション」の本質とは何かを私たちにあらためて問いかけています。答の見えない厳しい時代、様々な教育実践や研究成果を繋ぎ、知と経験を公開・共有しつつ磨き深め、多難な時代を乗り越えるため、本学会が皆様の研究・実践の交流・発展、発信を支える場の一つとなれば幸いです。

昨年 8 月から、田中功一会長、小林田鶴子副会長、飯泉祐美子副会長のもと、新事務局体制がスタートしました。どうぞよろしくお願いします。次回 2 月 14 日の研究会で、会場あるいはオンラインで皆様とお目にかかれることを願っております。
（事務局：鎌田千佳、林麻由美、兼古勝史）